

ニュージーランドECEにおける保育環境に関する 視察結果の検討

や はぎ やす こ
矢 萩 恭 子

〈要 旨〉

日本では、幼児教育・保育・地域の子どもや子育ての支援を総合的に推進し、その質と量の拡充を図るものとして、2015年4月より「子ども・子育て支援新制度」が施行されている。本研究は、新たな制度の下に多様化する保育実践の場においてますます求められる保育の質に関して、ニュージーランドのEarlyChildhoodEducation(以下、ECE)における保育環境の事例を取り上げまとめたものである。子どもが自ら主体的にかかわるための保育環境の意義と重要性について諸外国の保育実践に学ぶ主旨から、1986年に幼保一元化を達成して以来、次々と新たな改革が展開されているニュージーランドのECEにおける保育環境のうち、特に、物的・空間的環境構成がもつ特徴について検討することにより、改めて子どもの遊びと保育環境の関係について考えることを目的とした。

その結果、ニュージーランドECEと我が国とは、文化や歴史の違いをはじめ、集団の規模、小学校への就学時期、保育内容や施設設置基準の違いなどから、単純に比較することは難しいものの、視察先のニュージーランドECEでは、自発性・多様性の面で子どもの活動欲求を満たしつつ、子どもの主体性を引き出し、相互のコミュニケーションを通じて個々の発達を促す環境が保障されるとともに、保育の質の向上が図られていることが分かった。

〈キーワード〉

子どもの遊びと保育環境、自発性・多様性、相互コミュニケーション、保育の質の向上

I. はじめに

1. 問題の所在と目的

子どもが自ら環境に主体的にかかわるための保育環境の意義と重要性は、我が国の乳幼児期の保育を支える理念・原則の中心に位置する。2008年の『保育所保育指針』¹⁾においては、「子どもが現在をもっとも良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うために」「人、物、場など

の環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かなものとなるよう」計画的に環境を構成し工夫することが述べられている。そして、「子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるよう配慮すること」や、安全で保健的な環境の確保、温かな雰囲気と生き生きとした活動の場となるための配慮、人とのかかわりを育む環境が求められている。特に、保育所は子どもが長時間生活する場であることから、「活動の静と動のバランスや子どもの発達過程などを踏まえ、一人遊びや少人数での遊びに集中したり、ほっとくつろげる時間と空間が保障される環境であるとともに、友達と一緒に思い切り身体を動かすなど様々な活動に取り組むことのできる環境であることが重要」だという点には留意が必要であろう。また、周知のとおり、『幼稚園教育要領』²⁾においても、幼稚園教育の基本として「環境を通して行う教育」の意義が示され、「幼稚園教育は、幼児が自ら意欲をもって環境とかかわることによりつくり出される具体的な活動を通して、その目標の達成を図るものである」こと、「幼児の環境との主体的なかかわりを大切にした教育」として「環境の中に教育的価値を含ませながら、幼児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしいかかわり方を身に付けていくことを意図した教育」であることが明記されている。また、一人一人異なる興味や関心を持ち、その発達の過程や発達する姿が異なる幼児に対しては、「活動に没頭する中で思考を巡らし、心を動かしながら豊かな体験をしていく」ために、教師はその環境が常に適切なものとなるように環境の構成を工夫し、再構成していかねばならない。つまり、保育における子どもの遊びの環境は、子ども自身が人やモノと様々に出会い、様々なやり方やかかわっていただけるだけの多様性が求められていると言えるだろう。2015年4月より施行された「子ども・子育て支援新制度」に先立ち、2014年4月30日に内閣府・文部科学省・厚生労働省より『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』³⁾が告示されたが、その教育・保育の基本は、「乳幼児期の特性及び保護者や地域の実態を踏まえ、環境を通して行うもの」であり、子どもが自ら環境に主体的にかかわるための保育環境の意義と重要性は、我が国の乳幼児期の保育を支える理念・原則の中心として変わらずに位置付けられた。

保育環境に関する研究については、園庭・園舎の設計や設備、自然や生き物、玩具・遊具・教材、音や光と表現活動との関係、乳児保育のための室内環境、環境の安全性や応答性、環境教育や多文化理解、歴史的変遷、基準や評価など多岐にわたり、その研究方法の多くは、具体的な保育実践の場における観察や試みを通じた結果に基づくものとなっている。無藤(2012)⁴⁾は、園の環境を検討・デザインする視点として、素材、遊具・教材、活動、空間構成という4つの側面から整理した。また、柴崎(1997, 2013)⁵⁾は、保育環境と活動の展開との関連性を実践事例や改善・研修事例から示した。さらに、高山(2014)⁶⁾は、保育者の専門性に基づいた環境構成について多様な保育実践に共通する原則を具体例に即して導き出そうとしており、埋橋(2004)⁷⁾は、乳幼児期の保育の質を測定するための尺度項目ECERSを日本に紹介し、一連の研究を行っている。一方、全国の保育所アンケート調査・保育所視察調査・保育室の使われ方観察調査を基に住居学・建築学の立場から、保育環境を生活・あそび・運営管理という3つの側面に沿っ

て動作空間、面積や動線、設備や配置、開始・終了時間などを測定した調査ならびに観察調査結果をまとめた定行ら(2014)⁸⁾の研究や、日本建築学会編による事典⁹⁾も発刊されている。

ところで、こうした保育環境について考え、保育の質の改善と向上について検討する際には、諸外国の保育実践に学ぶことも有効である。本研究では、1986年に幼保一元化を達成して以来、次々と新たな改革が展開されているニュージーランドECEにおける保育環境について、視察訪問したうちの10施設の事例を取り上げ、その環境がもつ特徴について検討し、さらに、あるpreschoolでの15年間の保育実践の変化について、保育環境の改善と創造という視点から考察することにより、改めて子どもの遊びと保育環境の関係について考えることを目的とする。

2. 研究方法

(1) 視察訪問先10施設の事例について

ニュージーランド北島首都ウェリントンから北に約200kmに位置するマナワツ地方の中心地パーマストンノースでのECE視察結果について、埋橋(2004)¹⁰⁾により日本に紹介された乳幼児期の環境を測定するための尺度項目ECERS、高山(2014)¹¹⁾の示す保育環境についての原理、定行ら(2014)の調査結果などを参考に、『保育所保育指針』・『幼稚園教育要領』・『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』に示されている、子どもの「自発性」「主体性」、人やモノとの「多様な経験」が保障されている環境と言えるかどうか検討する。なお、視察では保育観察や保育者へのインタビューも行ったが、視察先によりその状況に違いがあったため、本研究で考察の対象とする保育環境は、子どもの遊びのための室内および園庭の物的環境構成および空間構成とする。なお、本研究で示す写真の撮影については、視察訪問先施設による許諾を得ている。

(2) あるpreschoolでの15年間の保育環境の変化について

ニュージーランド最大の都市オークランド近郊にある私立の就学前保育施設の保育と保育環境を視察した結果について、山岡(2004)¹²⁾による同園の訪問報告を参考としながら、2000年の開園から5年間の保育環境改善の軌跡がまとめられた記録ファイルの内容と、15年後の現在の保育の環境とを比較し、保育の質の向上への試みに関して考察する。また、(1)と同様に、ECERSや、高山(2014)¹³⁾の示す保育環境についての原理、定行ら(2014)の調査結果なども参考に考える。

II. 結果および考察

1. パーマストンノース10施設の視察結果と考察

(1) 視察先について

視察先10施設の施設種別¹⁴⁾は、幼稚園2園(①, ②)、保育園・私立幼稚園を含む保育セン

ター5園(③, ④, ⑤, ⑥, ⑦)プレイセンター3か所(⑧)である。各視察時間は、1時間程度～1日まで施設により異なる。各視察時期については、(2)に記す。

(2) 保育環境について

①A幼稚園：2008/3/12 訪問

室内は、多くの教材・遊具などの物的環境で溢れている印象であった。特徴的なマオリ文化の展示スペースには、マオリ語のことわざが書かれた掲示物や手工芸品などがあつた。製作活動をしている机のそばには、30種類あまりの素材や材料が、マオリ文化独特の編みかごに入れられて分類され、周囲には廃材を入れた箱も置かれていた。パズルや積み木などの玩具で遊べるスペース、楽器が並べられたスペース、人形の家や子どもが着て遊べる衣装が整えられたスペース、鳥かごや植物といった生き物など、多種多様な教材・遊具・用具が設置されていたが、子どもたちは思い思いの場を選んで遊び、くつろいで過ごしている様子であった。



写真1 製作活動のための素材

また、壁じゅうに子どもの描いた作品や、保育者が書いたと思われる掲示物などが天井近くまで展示されていた。子ども一人一人の日々の学びと成長の記録ファイルであるポートフォリオは、子どもたち自身にも手の届く高さに収納されていた。

園庭は広く、3種の大型固定遊具が設置されていた。飼育小屋のまわりの花壇で女兒たちが小さなじょうろでさかんに水やりをしていた。また、大きな木製の用具入れが設置された広い砂場や、屋根付きの描画や水遊びができるスペースなどがあつた。地面は、安全なラバーで覆われているか、柔らかな木片チップが敷き詰められていた。

②B幼稚園：2014/3/5, 3/12 訪問

室内は、①よりも広々としており、やはりたくさん遊びのための場が設置されていた。製作の素材の種類は①より少なかったが、机の周囲の空間にゆとりがあり、一人の女兒が黙々と絵の具で絵を描いていた。少し離れた丸い机では、色鮮やかな粘土のスペースがあつた。また、カーペット敷きでソファのある場では、男児一人がじっくりと絵本のページをめくっており、二段の低い本棚にはアルファベット順にポートフォリオが入っていた。様々な大きさの積み木や井形ブロック、レールなど、構成遊びの遊具が豊富にあり、パズル・駐車場・車などの種類も多かつた。Scienceボックスに、石や砂が入れられ、その角の壁には、虫や動物の製作作品が展示されていた。ライトテーブル、オーディオセット、パソコン等も置かれていた。面白かつたのは、ごっこ遊びの一角が本物の美容室のようにセッティングされていた点である。頭に被る仕様のドライヤー、鏡、カツラ、ネイル、料金表など、実物で体験できる本格的なものであつた。人形のベッドは、子ども自身も横になれる実物大で、肌の色の異なる複数の人形が用意されていた。室内の壁紙には、①とは異なり、壁びっ

しりではなく適度な量の子どもの作品が展示されていた。文字環境としてウォールポケットに個々の名前が入っているなどは①と同様である。この園の特徴は、平屋の園舎と庭とをつなぐ部分に幅広い雨除け付きのテラスがあることで、そこにもカーペットが敷かれ、一角がクッションやベンチのある寛ぎの空間となっていた。また、もう一つの机では、磁石のパズルや色板の教材で落ち着いて遊んでいた。

次に、巨木や広い砂場を有する広大な庭には、タイヤブランコやすべり台といった固定遊具の他に、可動式の運動遊具が組み合わせられて設置されていた。あたり一面砂場となっている部分で2,3人の男児が大きな木製の工事車両で遊んでいた。

一方、植物園のように広い自然の庭を歩き回ったり、大きな古タイヤや畑に植えた野菜に水をあげたりしている子どもたちがいた。また、より多くの子どもが集まって遊んでいたのは、水を入れた丸い大きなたらいのような容器の周りであった。子どもが立った姿勢で操作できる高さが遊びへ入りやすくしている様子が見受けられた。



写真2 立って遊べる高さの水場

③C保育園：2014/3/11 訪問

同じ建物だが、Preschool部分とNursery部分は玄関が分かれている。ここでは、Preschoolを取りあげる。室内は①②と異なり、大きな一部屋を遊びのコーナーに区切るのではなく、5部屋ほどの部屋がそれぞれの遊びの環境別に設定されていた。ぬいぐるみや楽器のある部屋、描画の机や積み木・パズルなどのある部屋、ままごとの部屋、ソファとパソコンのある部屋、造形活動の教材・用具と料理道具がある部屋、そして調理室である。子どもの行き来は自由で、一軒の家のような家庭的な空間構成であった。但し、壁・柱・窓枠などが、黄・青・赤・黄緑といった原色で落ち着かないようにも思われた。楽器の棚上の壁面にワイタング条約の展示があり、国の歴史や成り立ちを感じさせるものだった。マオリ織物の各自の袋に子どもの写真と一緒にMihiと言われるその子どもの生まれや育ちについて書かれた紙が貼られていた。

庭は、それほど広くはないが、これまた本物の金槌や鋸などの道具棚と作業台のある木工スペース、絵の具とイーゼルが置かれたスペース、木々の間の地面に敷物が敷かれ音楽が流せるラジカセが置かれたスペースなどがあった。大型の固定遊具の下には大きなクッションがあり、そこで寛いで絵本を読んでいる女兒がいた。また、通路の欄干を利用して、白



写真3 木工作業台と道具棚

い雨どいのような筒に大小さまざまな大きさのボールを転がしてバケツに入れる遊び環境が見られた。庭の一角の周囲を囲まれた空間には、高さのある丸いたらい様容器が設置され、ドロドロのスライム状の液体にミニカーを走らせて集中している一人の男児の姿があった。

④D保育園：2014/3/5 訪問

小ぢんまりとした平屋の園舎に比して、広大な庭が特徴的な園である。室内は、乳児室・幼児室・キッチン・トイレ・オフィス等から成る。広い庭へ続く間に半室内のようなテラス室があり、幼児のテラス室には流しのついた造形スペースと楽器棚のあるスペースが、乳児のテラス室には小さなすべり台と幾つかの玩具が置かれたスペースがあった。清掃のみを職務とする短時間の職員が来ていたが、室内は子どもの活動後の雑然とした雰囲気があり、幼児室は広くはなく、遊具や教材の遊び環境は少なかった。ポर्टフォリオは、子どもの手の届かない高さの壁面に取り付けた棚に並んでいたが、玄関入口の保護者向けの掲示は、それほど広くはないスペースに多くの情報が提示され充実していた。一方、庭へ出ると、大変広い敷地に大きな木々が茂り、芝生・草・木片チップ・土・コンクリートとさまざまな地面のエリアがあった。大きな固定遊具、大きな移動遊具入れ、砂場、ぶらんこ、乳児用の庭スペース、飼育小屋、畑、ままごとの小屋などが配置されていた。



写真4 自然ゆたかな広大な庭が特徴

⑤E保育園：2008/3/14, 2014/3/5 訪問

国内有数の保育施設と言われるだけあって、室内の保育環境は、よく考えられている。ここでは、3、4歳児クラスを取りあげる。貝殻や石・切り株・木切れなどの自然物のスペース、骨や化石などを集めたスペース、ナンバープレートの数字やおはじきのようなガラスの粒が並べられたスペース、宇宙やロケット・惑星などのスペース、雨やしづく・雨の中の外出の様子の写真のスペース、かごに入れられたさまざまな



写真5 鏡の前の美しいガラス粒の配列

タイルやタイルの本などが広げられ、モザイク体験をしている様子の写真が展示されているスペース、大きなライトテーブル、積み木やブロック(Duplo)、パズルのスペース、動物がテーマのスペースなど多種多様なテーマ別の空間で室内がレイアウトされている。基本的には、2、3名くらいの小規模の人数が落ち着いて取り組めるスペースになっていた。壁面には、日常のさまざまな遊びや園外での経験の様子を振り返るような展示があった。また、布や鏡などさまざまな素材を使って空間を立体的に演出する工夫が随所に見られた。保護者

向けと思われるが、子どもの主体的な学びや経験の姿がテ・ファリキ¹⁵⁾に則って説明されている掲示物や、子どもの遊びから学びや成長の姿を読み取らせる手作りの絵本風冊子などがあつた。庭との間の半室内空間には、植物が置かれた描画スペースや、絵本の登場人物の感情を表す単語カードが置かれたスペース、ミニチュアサイズでない家具や道具がおかれたごっこ遊びのスペース、などがあつた。ここでも人形は、いろいろな肌の色をしていた。

庭は、広大というほどではないが、木々が茂り、木製の固定遊具や砂場、四面が使えるイーゼルなどが設置されていた。

⑥F保育園：2014/3/13, 2015/3/18 訪問

本園は、マオリ市民が多く住む地域にある総合福祉施設の一部門で、保育室はワンフロアの大空間を幾つかの遊びスペースに区切って作られていた。室内で目を引くのは、マオリ文化のコーナーのテントで、中にはMihiと呼ばれる子どもそれぞれの出自や紹介が書かれた展示があり、朝の集まりでも順番に自己紹介のような活動をしていた。その隣のままと遊びの家具はサイズが不揃いなものもあり、食器はプラスチック容器であつた。他には、廃材が用意された製作活動や流しがある描画活動のためのスペース、じゅうたん敷きの絵本のコーナーなどがあつた。



写真6 マオリテントでの朝の集まり

庭へ続くテラスには、木切れの積み木や木工活動のための道具やスペースが確保されていた。庭には、②のB幼稚園と同じ可動式の運動遊具が置かれ、最初の訪問時、砂場では10名程度の男児と女児が水を引き、熱中して遊んでいた。そこから消防士の帽子を被った男児5、6名が広い芝生へホースを持って出ていき、火事ごっこに長い時間集中していた。庭の隅には、菜園があり、生き物の飼育もされていた。

⑦G保育園：2015/3/16 訪問

市内中心よりそう遠くない地域に位置する民間の保育園で、建物は乳児棟と幼児棟とに分かれ、互いに園庭を挟んで隣接している。庭の入り口は状況に応じて開閉され、訪問日にも、月齢の高い2歳女児が幼児棟の子ども達の中に混じって過ごしていた。

園庭には思い切り水を流して遊べる広い砂場やツリーハウスをもつ木製大型遊具が設置され、その周囲は、子どもが三輪車を乗り回せる木道がぐるりと囲んでいた。この園にも、園舎と庭の間に大変広いテラス部分の空間があつた。屋根がつき、雨天でも活



写真7 アトリエのような広いテラスの一角

動できるこの場所には、アトリエのような描画や制作のための環境や、木工作业スペース、ブロック遊びのスペース、ゆっくりとくつろげるソファなどが配置されていた。室内は、③のC保育園に似て一軒の居宅のような雰囲気、ランチスペース・ごっこ遊びのスペース・積み木やブロックなど構成遊びのスペース・カーペットやクッションと透ける素材の布などで作られたくつろぎのスペースなどが部屋ごとに環境構成されていた。

⑧Hプレイセンター：2014/3/6 訪問，Iプレイセンター：2014/3/10，2015/3/17 訪問，Jプレイセンター：2015/3/18 訪問

プレイセンターは、ニュージーランド独自の保育制度であり、国から正規の助成金を得ている認可保育施設であるが、保護者により運営され、テ・ファリキを実践し、一定の水準を維持している。市内に3か所あるプレイセンター全てを訪問したが、Hは空港にほど近い小規模な施設、Iは市街地に近い大きな施設、Jは市の東側に位置するその中間の規模の施設である。



写真8 保育者は子どもの保護者

Families Growing Togetherという基本理念の下、子どもの主体的な活動である遊びについてLearning is Playという保育理念を掲げ、保護者たちは、小麦粉粘土、砂、水、絵の具、フィンガーペインティング、音楽、積み木、ごっこ遊び、パズル、コラージュ、立体工作、木工、運動、自然科学など16分野の遊びとその多様な教材や環境構成についてコースブックで学んでいるため、基本的には共通する保育環境の要素を持っている。室内には、積み木や楽器、パズル、その他の玩具が設置されたスペース、ソファのあるスペース、製作活動のための用具・材料のあるスペース、大小いろいろな肌の色の人形や、家具、衣装などがあるままごと遊びのためのスペース、絵本のスペース、キッチンと食事のためのスペースなどがある。

Iには、庭との間に幅の広いテラスがあり、木工活動のコーナーや、ピアノと三角ステージなどが配されていた。Hの庭は、小ぢんまりとしてはいるが、砂場と芝生、移動式運動遊具がある木片チップが敷かれたスペースの他、Iほどの大きさではないが、外遊び用の倉庫や栽培植物が見られた。Iの庭は、大変広く、広い砂場に豊富な固定遊具、すべり台、ぶらんこ、水遊び場、ブドウ棚を初めとする果実やその他の木々などに恵まれていた。Jの庭の特徴は、建物の前にある庭の他に、木々に囲まれた斜面をもつBack Yardがあることで、子どもたちはこの斜面に古タイヤをころがしたり、駆け下りたりして遊具のある前庭での様子とは打って変わった躍動的な姿



写真9 Jプレイセンターの裏庭の斜面

を見せていた。

(3) 保育環境についての考察

次に、視察結果を受けて、ECERSの尺度項目と高山の示す基本原理、定行らの調査項目などを参考に考察する。

1) 子どもの遊び環境としての質の高さ

表1は、視察先施設全体を総合的に見て、子どもの遊びのための保育環境についてECERSの尺度項目に当てはまる項目を選定項目として取り出してみたものである。紙面の都合上、評価項目スケール全体を掲載することは困難であるが、中項目それぞれに<不適切><最低限><よい><とてもよい>にあたる評価文が複数個ずつ挙げられており、それぞれに1・3・5・7の数字が振られ、例えば<不適切>に評価文が2つあれば、1.1, 1.2, <よい>に評価文が3つあれば、5.1, 5.2, 5.3のように表され、スコアシートでは各中項目は評定基準に沿って7段階評価される。なお、選定する基準として、(1)7つの大項目のうち、<個人的な日常のケア><相互関係><保育計画><保護者と保育者>は、物的環境構成、空間構成ではなく、人間関係ややりとり、保育者の援助やかかわりなど人的環境に関する項目であるため、今回は削除した。(2)<空間と家具><言語—推理><活動>の各項目についても、限られた時間内での視察見学であったことから、時間の推移におけるプロセスを表す項目や、人間関係ややりとり、保育者の援助やかかわりに関係する項目以外の、物的環境構成、空間構成に関わる項目を選んだ。また、反対に、<言語—推理>の中のコミュニケーションに含まれる項目群のうち、教材にかかわる項目は入れた。

大項目	中項目	選定項目
空間と家具	室内空間	3.2, 3.4, 3.5, 5.1, 5.2, 5.3
	日常のケア、遊び、学びのための家具	5.2, 7.1, 7.2
	くつろぎと安らぎのための家具	3.1, 5.3, 7.1, 7.2
	遊びのための室内構成	5.2, 5.3, 7.1, 7.2, 7.3
	プライバシーのための空間	3.1, 3.2, 5.1, 7.1
	子どもに関係する展示	3.1, 5.1, 5.3, 7.1, 7.2
	粗大運動(身体を動かす)遊びのための空間	5.1, 5.2, 5.3, 7.1, 7.2, 7.3
	粗大運動のための設備・備品	3.3, 5.1, 5.2, 5.3, 7.1, 7.2
言語-推理	本と絵・写真	5.2, 5.3, 5.4, 7.1, 7.2
	コミュニケーション	5.2
活動	微細運動(手や指を使う)	5.1, 5.2, 5.3, 7.1, 7.2
	造形	5.1, 5.2, 7.2
	音楽/リズム	5.1, 5.2, 7.1
	積み木	5.2, 5.4, 7.2, 7.3
	砂/水	5.2, 5.3, 7.1, 7.2
	ごっこ遊び	5.1, 5.4, 7.1, 7.2, 7.3
	自然/科学	5.3, 7.3
	算数/数	5.1, 5.3, 7.2
	テレビ・ビデオ・コンピュータ	5.1, 5.3, 7.2
	多様性の受容	3.1, 5.1, 5.2

表1. 『保育環境評価スケール』<幼児版>における選定項目一覧

選定項目を見ると、全般的に<よい>評定にあたる5と<とてもよい>評定にあたる7が多くなっている。具体的選定項目は別添資料に示すが、物的・空間的環境の構成と子どもたちの遊びの様子の両面から見て、それぞれの遊びのためのスペースが適切な広さの利用しやすい空間となっていた。また、視察先によって少しずつ差はあるものの、家具や備品、教材などが子どもの動きを妨げず、活動のためのびのびと動くことができる空間があり、手入れが行き届いて適切に清潔が保たれていた。さらに空間の構成として、遊びのための多様なスペースが物的環境とともに提示されている中で、一人になれる場や少人数で過ごせる場、より大勢で向き合える場の設定が工夫されていた。これは、どの視察先も環境全体の広さが十分確保されていることとも関連していると思われる。遊び環境の設定の仕方としては、一つの大きなスペースを遊びの活動別に区切って設定している視察先と、比較的小さな部屋別に設定している視察先とがあった。後者の設定では、子どもの遊びを保育者が見渡すことの難しさもあるが、どの視察先の保育者も大きな声を立てることなく、悠然としていたのが印象的である。また、視察時の子どもたちは、室内・戸外いずれでも自由に過ごし、活動の様子は、手先・指先を使う微細運動を要する教材・遊具に触れる姿や、豊かな自然環境溢れる園庭で、大型固定遊具や移動遊具を使って、身体を思い切り動かす粗大運動を楽しめる環境が認められた。その他の活動の種類として、造形・音楽・砂/水・ごっこ遊び・自然/科学・算数/数などについては、どの視察先でも豊かに用意されていた。但し、テレビ/ビデオ/コンピュータについては、視察先により差が見られた。

そして、ニュージーランドECEの遊び環境の大きな特徴として、室内と園庭との間をつなぐ屋根付きの広い「テラス」の存在が欠かせない。雨天時ばかりでなく、晴天時も強い紫外線から子どもたちを守り、木工・描画・製作・積み木・パズル・ごっこ遊びなど、じっくりと活動に取り組めるスペースが複数設定されている。また、遊具や教材ばかりでなく、カーペットに大きなソファが2つ3つ、柔らかなクッションや天井から吊るされた布、鉢植えの緑などとともに設置されていて、そこでゆったりと過ごす子どもの姿が見られたのも印象深い。さらには、先住民族マオリや南太平洋諸島からの移民を抱えるこの国が、多様な言語による掲示や絵本、様々な肌の色の人形、写真、音楽、展示コーナーなど文化的多様性を教材としてその保育環境に取り入れているのも特徴である。

2) 遊びの環境構成を作り出す保育の質の高さ

保育者は、1) で見たような遊びの環境を子ども理解に基づいて計画し、作り出し、自らも人的環境としてかわり、さらに子どもの様子に合わせて変えていく営みを行っている。この環境構成の技術を理論的に説明することを試みた高山(2014)¹⁶⁾によると、保育者が環境構成を行う際に環境を把握するために考慮する要素としてa.の10要素が挙げられている。

- a. 環境の10要素：①自然，②物，③人，④色，⑤色以外の視覚刺激，⑥音，⑦空間，⑧動線，
⑨時間，⑩気温・温度・空気の質

また、環境構成を行う前提となる専門知識を支える技術としてb.の4つが示され、さらに実際に

知識と技術を用いて環境を構成していくためには、それらを現実の状況に合わせて柔軟に活用していく力が求められており、現実には様々な条件の下、矛盾をはらむ状況で「保育者は、多様な視点からそれぞれのバランスを考える必要がある」¹⁷⁾と述べている。これを、環境構成の両義性(c.)と呼び、矢印⇒以下の5つの局面に整理している。

- b. 環境構成の4つの技術：①玩具や生活用品を選択する技術，②空間を構成する技術，③日課を展開する技術，④自らを人的環境として活用する技術
- c. 環境構成の両義性：矛盾をはらむ保育環境のバランス(個と集団，静と動，緊張と弛緩，粗大と微細など)

⇒情緒の安定を促す環境と発達を促進する環境／安全な環境と挑戦ができる環境／
清潔な環境と抵抗力を獲得する環境／秩序と混沌／空間の構造化と自由度

ここで改めて視察先の保育環境を考えてみると、10要素については、①の自然が室内外に大変豊かに用意されていること、教材・遊具・家具などの質や色について一部の視察先で見た固定遊具や室内環境は別として、刺激を抑えた自然に近いもので一貫していること、子どもの動線を細かく気にしないでも済む空間の広さと構成、ゆったりと保障された遊びの時間、などが特徴であった。一点、⑤の色以外の視覚刺激として考えておかなければならないのは、掲示物の多さではないかと思われる。教材として、活動の記録として、子どもたち自身や家庭との情報共有のための手段(写真も結構多い)として、壁や窓、家具の一面など様々な場に掲示物が貼られている。壁紙の色や貼り方に工夫も見られるものの、ポータルフォリオをはじめ、子どもの目線に触れる位置を意識して多くの視覚情報があった。また、遊び環境により深く関係する①と②について環境構成の技術を考えると、どの視察先にも、居心地のよさや自分から手を伸ばしたくなるような環境構成の工夫が感じられたが、中でも、(2)⑤のE幼稚園には、一つ一つの活動のスペースの設定に日々思考を重ねる保育者の技術が光っていた。c.の両義性については、3月という視察時期ということで、新たな学期が始まったばかりの時期であることを考えると、子どもたちの情緒の安定度はかなり高いように見受けられた。その一方で、運動遊具の高い位置から飛び降りたり、砂場の不安定な地面で大きな木製クレーンを倒れないように操作しようとしたりする挑戦する姿も見られた。清潔さや秩序に関しては、各視察先とも当然、清掃・整理は行われてはいるものの、遊びの最中の視察であったこともあり、ごっこ遊びのスペースの衣装や人形たちの雑然とした散らかり具合、遊びスペースに敷かれたカーペットの汚れ具合、箱に入れられた積み木やパズルなどの年月を経た使用感などがあるのは自然であろう。但し、長い時間そのままになっている遊具や教材は、保育者が秩序ある状態に正してもよいのではないかと思われる場面もない訳ではなかった。空間の構造化については、子どもの年齢や時期、それまでの遊びの経験などから単発的な視察調査だけでははかりにくい面があるが、遊具・教材の配置や、いろいろな遊びや活動のスペースを見ると、個々の子どもが様々な興味・関心を自分なりに実現しやすい遊び環境として構造化された場の作り方であることを感じた。

以上を総合して振り返ると、それぞれの施設のもつ条件や特徴の違いから、物的環境や空間構成の充実度には一定の差が見られたものの、ECERSで言う活動の「センター」(本文中では、遊びの「スペース」¹⁸⁾として表現した)が子どもに使いやすいように構成され、そこに玩具・用具・教材・材料が子ども自身の手が届くところに豊富に配置され、粗大運動・微細運動、造形、音楽、ごっこ遊び、自然科学や数、砂や水などの経験が十分に保障される環境、文化や人種の多様性が受け入れられている環境、落ち着いて遊びに取り組めると同時に、挑戦や探求が可能な遊びの環境が多く認められた。それには、人為的な構成の手が加わっているにせよ、物的環境を大きく包み込むような土・砂・木・水・石・植物・生き物といった豊かな自然環境との組み合わせと調和が、園庭ばかりでなく、室内環境においても意識されていることが特徴となっている。

また、活動内容が種類別に構造化された遊びの環境構成の中にも個々の子どもが主体的にその子ども独自のやり方で周囲の環境と触れ合い、日々の経験が積み重ねられていることは、室内に備えられたポートフォリオにラーニングストーリーとして記録された内容から推し量ることができる。これらのことについては、この国のナショナル・カリキュラムである「テ・ファリキ」の理念が確実に実施されていることによるものであることが見て取れた。ニュージーランドECEの保育環境は、遊びにおいて子どもの主体性・自発性を引き出し、多様な活動を可能にする条件を有していると考えられる。

2. オークランドでの視察結果と考察

(1) 視察先について

オークランドは、北島北部ノースランド半島のくびれた部分に位置し、南太平洋とタズマン海に挟まれたニュージーランド最大の都市。貿易、商工業の中心地であると同時に、空と海の玄関口と言われる。人口約153万人(全人口約440万人のうちの1/3)、面積約5,000km²。ヨーロッパ系住民を中心に、マオリ系、世界最大のポリネシア系人口をもつ。視察先は、City中心ではなく、ハーバーブリッジを渡った海岸地域に位置する私立の保育園である。

1998年、南アフリカ共和国から園長夫妻が4人の子どもを連れてこの地に入り、2000年に民家を購入して始めた。オークランド大学でa bachelor of teaching degreeの学士号を得た夫人が園の教育プログラム・保育者のサポート・保護者との連携を担当し、臨床心理学の修士号をもつ夫が、園の財政面と食事(調理)を担当している。イタリアのレッジョ・エミリアの教育思想に強い影響を受け、設立以来15年の間、環境を重視した保育実践を研究・深化させてきた。訪問日は、2015/3/20,21の2日間である。



写真10 バス通りに面した現在の入り口

(2)園の保育について

1)クラス編制

定員 41 名の内訳は、まず、Infants and Toddlersが定員 8 名に、保育者 2 名とrelief teacherが 1 名の計 3 名で、子ども達は、週 2 日登園から週 5 日登園までさまざまである。Over 2 と呼ばれるいわゆる幼児が 29 名で、そのうち 2 歳～ 3 歳半の子どもが 13 名(曜日によっては、8 名～ 10 名で保育者 2 名とrelief teacherが 1 名の計 3 名)、3 歳半～ 5 歳の子ども(保育者 2 名)が計 16 名である。

2)1日の流れ

・Infants and Toddlers

7:30～8:30 順次幼児クラスへ登園

8:30～ 自分の保育室へ移動、必要に応じて午前睡。寝ない子どもはそれぞれの活動

9:15～ おむつ交換を始める。モーニングティー、天候により室内外での遊び

11:00～11:30 昼食、おむつ交換

11:45～ ベッドルームで入眠まで保育者がつく。午睡をしない子どもは室内で遊ぶ。

13:00～ 目覚め、着替え、おむつチェック、授乳後、遊んでいる子どもに加わる。

14:30～ おやつ、おむつ交換、室内外での遊び

16:30～ 片付け、幼児クラスへの移動準備

～ 17:30 順次降園

・Over 2

7:30～8:30 順次登園後、室内外での遊び

9:30～ 朝の集まり(話し合い)

9:45～ モーニングティー

11:15～ 排泄、おむつ交換、片付け

11:45～ マット・タイム、手洗い、昼食、休息、午睡など。午睡をしない子どもは室内外を選んで遊ぶ。

14:15～ 午睡から目覚めて遊ぶ。排泄、おむつ交換

14:30～ 手洗い、おやつ

15:30～ 外の片付け、天候により外遊び・室内での遊び

16:30～ 乳児クラスの子どもたちが合流

～ 17:30 順次降園

3)保育理念

イタリア発祥のレッジョ・エミリアのPhilosophyを掲げ、第3の教師としての環境を重視している。保育者全員が、REANZ(Reggio Emilia Aotearoa New Zealand)のメンバーであり、メルボルンへのStudy Tourや、本園の園長をリーダーとする十数園によるevening meetingという研究会(18:00

～20:00)では、互いの園環境を見合って協議を行っている。

また、本園のPhilosophy Statementのうち、環境にかかわる記述を抜き出してみると以下のとおりである。これには、子どもの学びの環境に果たす保育者の役割の重要性が述べられている。

- ・我々は、ともに学び成長する共同体である
- ・我々は、それぞれを知的で美的で情感豊かにする環境を互いに創造するために影響し合っている
- ・保育者は、子ども達に思考力や好奇心とセンス・オブ・ワンダーを生み出す環境を用意する
- ・子どもは、環境に働きかけて、その潜在する力を大いに発揮し、発達する権利をもっている
- ・豊かな質のよい環境は、環境に対する応答性を引き出す
- ・保護者との連携と保護者の参画は、学びの環境の重要な一部である
- ・学びの環境を保障する保育者の役割はきわめて重要である

園長インタビューから得られた、新たにこの地に本園を設置し、保育環境を改善・創造していくについての問いは以下のとおりである。子ども自身がつまむ発達する力を信頼し、その学ぶ存在としての主体性・自発性を重んじ、そのための環境の重要性と意義を語っている。

- ・子どもの有能さを環境を通じていかに引き出すことができるか
- ・我々が園の環境を通じて、我々が子どもを尊重し、子どもを自らの学びに対する探究者・好奇心あふれる主人公として捉えていることを示すにはどうしたらよいただろうか
- ・我々はどうしたら、子ども達に学び続ける存在となるための環境を用意できるだろうか
- ・我々はいかに豊かな「子どもたちの100の言葉」¹⁹⁾を語らせることができるだろうか

4) 環境を改善するための具体的取り組み

次に、視察日2日目に行われていた創立15周年記念行事の際に目にすることができた開園後5年間の本園の軌跡を写真とそこに添えられた文章でまとめた記録ファイルを基に、保育環境の改善に挑戦し続けた本園の過去と現在とを比較してみる。

(1) 開園当初の取り組み

まず、古い戸建て住宅の塀や壁のペインティングから着手された様子が写されていた。そして、倉庫の整理や掃除が始まり、必要な物と不用品とが選別されていく。さらに、今度は子どもの動線や生活・遊びの活動スペースを考慮して階段の移動やデッキテラスの拡張が行われる。また、外回りから室内に改良の手が入り、カーテン、事務用机、園児用ロッカーなどが設置されたとある。その次には、子どもたちの遊びや活動に目が向けられ、戸外に日陰スペースが確保され、室内にはユニコーンという4歳の子どものための読み書きスペースが作られ、遊びのためのスペース作りが行われている。

さらに2002年、オーストラリア・メルボルンでの研究視察をきっかけに、多すぎる玩具の整理が行われ、



写真11 塀のペインティング(当時)

玩具入れが自然の素材の藤かごに変更された。これにより、さらに玩具が精選されるとともに、玩具の置き方にも配慮が始まり、玩具棚の高さを低くしたり、床の材質や色を考え、幼児用机と椅子の材質・配置が見直された。そして、一人で静かに集中して遊べる小空間を創り出すようになった。



写真12 棚の高さ・玩具のかご(当時) 写真13 カーテン・机の配置(当時) 写真14 玩具の置き方(当時)

(2) 開園から5年の変化

その後の5年間に組み込まれた試みは、以下のとおりである。玩具の量がさらに精選されていく一方で、ドールハウスが導入されたとある。さらに、室内環境への自然物の教材の導入や、テーマのあるコーナー・保育者の美的感性が発揮されたコーナーが考案され、試行錯誤がなされている。(写真15) 戸外環境として、Over2(幼児クラス)の園庭改造が始まり、木々を植えて木陰を作り、土を入れて畑を作り、さらに、園庭に大型遊具が配置される。これにより、空間の構成は、平坦な状態から起伏のある状態へ変化を遂げる。(写真16)さらには、園庭の一角にあずまや造りが始まる。本園舎の基本が民家であることもあり、(1)で見た視察先のような広いテラスの確保が難しい現状から、この屋根のあるあずまや造りは不可欠であったことが窺える。(写真17)そして、幼児クラスの次は、Infant and Toddlersの保育室と園庭の改造である。棟と棟の間の中庭の空間に、緑と木陰が出現し、人工的な毒々しい色が廃され、砂場の道具が充実し、イーゼルや水盤が置かれ、見事な変化を遂げるのである。(写真18)



写真15 テーマ(楽器)のあるコーナーと布や鏡・緑を取り入れた美しいコーナー(当時)



写真 16 Over2 の以前の庭と現在の庭：緑や起伏が生まれ日陰ができ活動スペースがまとまっている



写真 17 Infant and Toddlersの以前の庭と現在の庭：遊具の質や色が変わり緑と日陰がある



写真 18 Infant and Toddlersの以前の保育室と現在の保育室：物が精選され視点が低くなる



写真 19 Over2 の以前の保育室と現在の保育室：物が精選され視点が低くなり自然物がある

乳児クラス・幼児クラス、それぞれ、室内環境も大きな変化を見せている。(写真 18,19)

(3) 保育環境改善についての考察

以上のような保育環境改善の試みの歩みをECERSの評価項目や環境の10要素とバランスなどの面から検討してみる。

1) ECERSの評価項目との比較

まず、空間と家具については、家具・備品を変え、より家庭的なくつろげる空間へと変化している。また、光・緑・風・匂い・色彩などへの配慮がなされ、家具や棚などが子どもの目線・子どもの高さ・子どものサイズを意識した配置になっている。自然の素材、柔らかい素材(ファブリック使用)の工夫が見られ、壁面や窓・天井といったスペースの使い方に細かな工夫がなされている。子ども自身の作品を始め、美的で芸術的な掲示や展示の仕方へと変わった。一方、園庭では、平坦で変化の少ない空間構成が、ゆったりと個が落ち着ける空間と大きく体を動かせる空間両方の確保に成功している。

物的環境構成や室内外の空間構成を考える上では、こうした遊び環境ばかりでなく、食事や排泄・睡眠といった子どもたちの日常生活場面にも細やかな配慮が見られることも見逃せない。そのために、安心感・温かさ・親しさに満ちた保育者のかかわりが無視できないことは当然であるが、園長の夫の調理は、食材・メニューに十分な配慮が行き届いているだけでなく、食事時間が快適になるよう、テーブル環境にも個を尊重した家庭的な配慮(テーブルの配置の仕方、自分の家族の写真が入れられた手作りのランチヨンマットなど)があった。また、幼児クラスの午睡時間は、カーテンで室内を暗くし、ブランケットやクッションを用いた環境構成を行い、興奮を抑える保育者のかかわりはあったが、強制ではなく、子どもによっては休息の時間とされていた。さらに、排泄に関して、トイレにあるおむつ交換台の周囲の壁面に、横になったときの子どもの目線に合わせた装飾が施されており、保育者の気遣いやセンスが光っていた。

言語については、異文化の言葉を伝える教材や文字を意識させる掲示の工夫が見られたほか、保育者の言葉かけやかかわりについて、どの保育者にも、子どもの気持ちや心情を汲んだ語りかけの様子が見られ、受け応えの態度にも子どもたちに対する深い愛情や優しさを感じたことは何よりも本園の特徴であった。また、活動として、生活の中に会話を意識し、話し合いを重視した集まりがあり、皆の前で家族が登場する会話を引き出す配慮があった。

その他の活動については、造形活動のための教材の種類や絵の具の出し方、活動場所の工夫が見られ、多様な活動を引き出す精選された玩具とごっこ遊びを誘う遊具やスペースが複数あった。異文化や文化の多様性を経験できるような教材・展示コーナーがあった。室外の自然環境はもちろん、室内にも自然素材の教材、植物、石などが意識して設置されていた。

2) 環境の10要素や環境におけるバランスとの比較

自然、物、人、色、色以外の視覚刺激、音、空間、動線、時間、気温・湿度・空気の質などどれをとってもたゆまぬ環境の改善と創造の歩みにおいて、細部に至るまで考え尽くされているように思われる。特に、玩具・教材の種類を研究し、プラスチック製の玩具を排除するなど、物の量と質

を繰り返し精選してきていることや、子どもの動線・目線を尊重して、低い高さの棚や背板がなく向こう側が見えるような家具を利用するようになってきたこと、ちょっとした玩具スペースに切り株が使われたり、台を覆う布の色柄にもこだわりがあったり、薄い布使いと照明とが組み合わされていたりなどは特徴的な改善点であろう。子どもの目線から出発したと思われる物的環境・空間の構成に、保育者ならではの計画や意図を加えて設定されているのだろうと思われた。一方、情緒の安定と発達の促進、安全と挑戦、清潔と抵抗力の獲得、秩序と混沌、空間の構造化と自由度といった両義的な環境構成のバランスについては、それらを考慮している様子が随所に窺える半面、多くの魅力的な活動の場が生み出されたことにより、見通しの悪さや、清潔・整頓を保つ大変さ、安全と危険のバランスに拮抗が生じている。元々が民家を買収した建物であることから、傾斜地で建物同士が複雑に繋がっている構造となっており、言ってみれば、その与えられた諸条件が上手く環境改善の試みに活かされていると考えられる。

子どもたちが、一人でも集団でも、思い思いの場で生き生きと遊んでいたことから、総じて、この視察先は、子どもの活動欲求を満たしつつ、子どもの主体性を引き出し、相互のコミュニケーションを通じて発達を促す保育環境が生み出されていると言ってもよいのではないか。

(4) 保育環境の改善・創造のために必要な要因

設立5年間の軌跡を綴った記録ファイルばかりでなく、保育者たちへのインタビューから、理想の保育を実践するために保育環境を改善し、創造してきた本園の歩みに有効な要素として考えられることをまとめると次のようになる。すなわち、第一に、この歩みに保育者たちが根気よく意欲的に取り組み、肉体的な協力も含め保護者の理解を得て進めることを可能にしたのは、管理職である園長のリーダーシップによるところが大きいのではないかということである。当たり前ならの保育を、保育環境を、絶えず振り返る姿勢や研究的姿勢が培われてきたのは、彼女自身のそうした姿から伝わるものであり、どの保育者にも園長である彼女を信頼している雰囲気と家族的な人間関係の絆を感じた。そして、食という子どもや保育者の日々の生活に欠かせない重要な部分を分け持っている園長の夫が果たす役割も大きい。台所にいる彼の方へ背伸びをして話しかけおかわりをねだる子どもがいたり、なかなか食が進まない子どものパンに彼がケチャップで絵を描くと様子が一転して元気が出る様子が見られたりした。園庭では、大きな彼の身体の横にびったりと腰を下ろして安心しきって身を任せて気持ちを落ち着かせている子どももいた。また、彼の即興の鼻歌は、保育の場を明るくなごませ、子どもも大人も楽しい気分になるものであった。そして実は、彼に限らず、それぞれの保育者が自分らしさを発揮して、自分らしくこの保育の場で心地よく過ごしていられることは、子どもたちの姿を同じように変えていく力となるだろう。さらに、このことの背景として、外国からの移民や、始めは別の職業を選択していた経歴をもつ保育者など、様々な経歴・人種の保育者により構成される保育者集団ならではの多様性の受容と調和への努力が土台となっているように思われる。

次に、この園には、先に見たように園の保育を支えるしっかりとしたphilosophyがあり、その目標や理念の共有がなされていることもまた本園の歩みを支えてきた重要な要素であると言えよう。保育者同士が協力して振り返りと話し合いを続け、自己研鑽するという学び続ける姿勢を実現してきたからこそ、保育環境の改善と創造もまた実現できたと言えるのではないか。そして、そのphilosophyは保護者に向けても発信されることにより、保育環境の改善に対する保護者の参画と協力が得られることに繋がっていく。記録ファイルに添えられた文章の数々には自分たちがやろうとしていることを伝えようとする保育者たちの意気込みが現れていた。

最後に、近隣の他園との研究会を実践したり、園長自らがイギリスへ行って国際的な研修会議に出席したりなど、世界に目を向けた開かれた園のあり方もまた重要であると思われる。保育の質の向上のためには、確固としたphilosophyと同時に、現況を見極め、いつでも柔軟に新しい考え方や試みを取り入れようとする姿勢もまた求められているからである。

Ⅲ. まとめと課題

子どもの遊びや育ちをどう捉えるかという保育観ならびに保育理念と、それに基づく具体的技術や実践力が、その園の保育環境や保育方法に直接影響することは言うまでもない。ニュージーランドと我が国とは、文化や歴史、社会環境の違いをはじめ、保育に関する制度や諸基準の違いがあり、集団の規模、保育時間、小学校への就学時期、保護者の保育への参加のあり方、多様な保育施設等、異なる点も多く単純に比較することは難しい。

しかし、今回このように現地での視察結果をまとめる過程で、我が国でも保育環境について様々な試みや挑戦がなされており、例えば、この遊びスペースならこの活動といった具合に構造化されすぎない環境構成のあり方の工夫や、同年齢集団における発達過程や人間関係を意識した活動やその環境への取り組み、子どもたち自身が遊びを創り出していくことを支える人的環境としての保育者の動きやかかわりが、より細心に緻密に考えられ重視されているという特徴などに改めて気づくことができた。根本的な違いは、我が国では、乳幼児期の保育・教育の全体的な内容や方向性は示されていないながら、ニュージーランドのようにナショナル・カリキュラムとして実際に活用される形では浸透していないところにあるのかもしれないが、今後はこれらをどのように比較分析していくかが問われている。

一方、環境には、遊びの保育環境ばかりでなく、生活環境という側面もあり、さらに、保育者の直接的援助や子ども同士の関係、保護者と保育者の関係等、物的環境構成や空間構成からは、読み取り切れない人的環境があり、時間の経過の中での遊びのプロセスにおける環境という問題もある。子どもの遊びと保育環境について総合的に考えるためには、今後より継続的な観察につなげていく必要がある、そのことがすなわち保育の質の向上について、「質」の内容に関する手が

かりを与えてくれることとなるであろう。そして、そこで発揮されている保育者の専門性についても明示できる形で示していくことが今後の課題である。

* 付記：本研究は、科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号 26350053(研究代表：矢萩恭子)の一部として「国際幼児教育学会」第35回大会、第36回大会にて行われた発表の内容に視察先施設の追加を行い、まとめたものである。視察先各施設ならびに視察依頼をお引き受けいただいた方々に謝意を表す。

- 1) 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館, 2008, p.219, p.220, p.27
- 2) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館, 2008, p.265, p.27
- 3) 内閣府・文部科学省・厚生労働省『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館, 2014, p.311
- 4) 無藤隆「保育実践と保育環境」『保育学研究』第50巻第3号, pp.4-7, 2012
- 5) 柴崎正行編著『子どもが生き生きする保育環境の構成』小学館, 1997, 『子どもが育つ保育環境づくり』学研教育みらい, 2013
- 6) 高山静子『環境構成の理論と実践 保育者の専門性に基づいて』エイデル研究所, 2014
- 7) テルマ・ハームス, リチャードM.クリフォード, デビィ・クレア, 埋橋玲子訳『保育環境評価スケール』幼児版, 法律文化社, 2004
- 8) 定行まり子編著『保育環境のデザイン—子どもの最善の利益のための環境構成—』, 全国社会福祉協議会, 2014
- 9) 日本建築学会編『こどもの環境づくり事典』青弓社, 2014 には、子どもの育ちを支える保育環境について、環境づくりの理念とともに豊富な建築ならびに環境づくりの事例が紹介されている。
- 10) アメリカで開発され広くヨーロッパやアジアで保育の質向上に用いられていると言われる埋橋訳(2004)による前掲書
- 11) 高山(2014)前掲書
- 12) 山岡テイ「世界の多文化子育てと教育第37回」愛育ねっと, 2011 <http://www.aiikunet.jp/practice/education/261.html>, 2015/7/15
- 13) 高山(2014)前掲書
- 14) 松川由紀子『ニュージーランドの子育てに学ぶ』小学館, 2004, pp104-106 の分類による。
- 15) 1996年に制定の運びとなったニュージーランド幼児教育のナショナル・カリキュラム。マオリ語で「織物」を意味する。子どもの発達と学びの成果learning outcomeを5つの要素と4つの原則が縦糸と横糸が織り合わさった枠組みとして捉え、それぞれの現場で多様に織り上げていくものとされている。
- 16) 高山(2014)前掲書
- 17) 高山(2014)前掲書, p.40
- 18) 「あそびスペース」について、定行ら(2014)の前掲書pp.113-116では、「保育室内等に適宜テーブルを出したり、マットを敷いたり、遊具を広げたりして、その都度あそびのためのスペースをつくっていくタイプ」の「オープンスペース」と、「あらかじめあそびの種類を特定した領域と、そのあそびに必要な遊具をそろえてセッティングするタイプ」の「コーナーセッティング」、「制作や読書等、ある特化した行為を行うために独立した諸室を設置するタイプ」の「専用室」の3つのタイプに分類して説明している。
- 19) 北イタリアの小さな都市レッジョ・エミリア幼児教育の創設者の一人であるローリス・マラグツィの詩のタイトル。子どもの主体性、子どもとの対話を重視し、子どもの知性と創造力を最大限に引き出そうとするその保育実践は、「創造性」「協同」「共同体」という三つの原理により貫かれており、子どもたちは、その驚きや発見をアートとしての様々な表現を通じてまさに「100の言葉」で語っていると捉える。

★Ⅱ. 結果および考察 表 1 別添資料・『保育環境評価スケール』における選定項目一覧

<空間と家具>

1. 室内空間

- 3.2 明るさ、換気、温度調節、防音が適切である。
- 3.4 適度に清潔であり手入れが行き届いている。
- 3.5 現在保育室を利用している、どの子どもやおとなにとっても利用しやすい空間である。
(例. 障害をもつ人、車椅子、歩行者のためのスロープや手すり。)
- 5.1 子どもと大人がのびのびと動き回ることでできる空間である。
(例. 家具が子どもの動きを様食べない、障害をもつ子どもに必要な設備を整えるための空間がある。)
- 5.2 風通しがよく、窓や天窓からの自然な光が採れる。
- 5.3 障害をもつ子どもやおとなが利用しやすい空間である。

2. 日常のケア、遊び、学びのための家具

- 5.2 すべての家具は丈夫で補修が行き届いている。
- 7.1 日常のケアのための家具は使いやすい。
(例. マットなどが使いやすくしまわれている。)
- 7.2 木のベンチ、砂・水遊び用のテーブル、イーゼルが使われている。

3. くつろぎと安らぎのための家具

- 3.1 子どもが使える柔らかい家具がある。(じゅうたん、クッションなど)
- 5.3 柔らかな家具はおおむね清潔で手入れがよく行き届いている。
- 7.1 くつろぎのエリア以外にも子どもが使える柔らかい家具がある。(ごっこ遊びのコーナーにクッションがある、じゅうたん敷いてある、敷き詰めじゅうたんがある)
- 7.2 子どもが使える柔らかくて清潔なおもちゃがたくさんある。

4. 遊びのための室内構成

- 5.2 静的な活動と動的な活動の場が交わらない(読んだり聞いたりする場は積木やままごとの場から離れている)。
- 5.3 いろいろな活動のスペースがお互いの妨げにならないように設定されている
(例. 活動の場で動き回れないように柵が置かれている、荒っ(まい)遊びや走ることができないように家具が置いてある)。
- 7.1 少なくとも、5つの活動センターがあり、さまざまな学びの経験ができる。
- 7.2 活動センターは子どもが自分で使えるように構成されている(ラベルが貼られた柵やおもちゃの入れ物がある、柵の置き場所にゆとりがある、おもちゃの柵の近くに遊びのスペースがある)。
- 7.3 活動センターを新たに設けたり、変えたりできる予備の材料がある。

5. プライバシーのための空間

- 3.1 子どもが1人になれる空間がある(家具や間仕切りのかげ、戸外の大型遊具、部屋の静かな空間)。
- 3.2 子どもがひとりになれる空間でも保育者の目が届く。
- 5.1 子どもが1-2人遊べる程度の、他の子どもから邪魔されないスペースがある。
(例. 邪魔をしない決まり、柵で守られた小さなスペース)
- 7.1 ひとりになれるスペースが複数ある。

6. 子どもに関係する展示

- 3.1 年齢にふさわしい題材(子どもの写真、季節感のある写真)。
- 5.1 題材が現在の子どもの活動や子ども自身に密接にかかわっている。
(例. 最近の活動についての作品や写真)。
- 5.3 子どもが見やすい位置に展示してある。
- 7.1 個性的な作品が多い。
- 7.2 平面的な作品だけでなく、立体的な作品がある(粘土、木工)。

7. 粗大運動(身体を動かす)遊びのための空間

- 5.1 適切な戸外の空間があり、室内にもある。
- 5.2 子どもだけで簡単に移動できる。
(例. 同じ階か部屋の近くにある、障害のある子どもにバリアがない。)
- 5.3 異なる活動が互いに妨げにならないように空間が構成されている。
(三輪車などで遊ぶ場所は登はん遊具やボール遊びの場所と離れている。)
- 7.1 戸外で身体を動かす場所の地面がいろいろとある。
(例. 砂、アスファルト、木のチップ、芝生)
- 7.2 戸外遊びを快適なものに保つ設備がある。
(例. 夏の日よけ、冬のひなた、風よけ、良好な排水)
- 7.3 便利な空間である。
(例. トイレや水飲み場に近い、使いやすい道具棚、保育室から直接行ける)

8. 粗大運動のための設備・備品

- 3.3 ほとんどの設備・備品が子どもの年齢や能力にふさわしい。
- 5.1 子どもが長く順番待ちをしなくても使えるだけの設備・備品がある。
- 5.2 設備・備品は多様な技能を育てる。
(例. バランスをとる、昇る、ボール遊び、三輪車などをこぐ)
- 5.3 グループ内の障害をもった子どもが使えるように調整された、あるいは特別の設備・備品がある。
- 7.1 固定遊具と持ち運べる遊具の両方がある。
- 7.2 粗大運動の異なったレベルの技能を育てる設備や備品がある(三輪車でペダルがあるものとなないもの、異なる大きさのボール、昇る設備でななめの昇り台がついているものとはしごのもの)。

<言語—推理>

15. 本と絵・写真

- 5.2 いろいろな言語教材が日常的に使われている<注2>。
<注2>いろいろな言語教材とは、ポスターや写真、パネルシアター、絵カードゲーム、物語、歌のテープです。
- 5.3 絵本センター(コーナー)が設けられている。
- 5.4 本や言語教材、活動が子どもに適切である**。
**適切な教材や活動の例は、年少の子どもと一緒に読めるような簡単な本、視覚障害をもった子どものための大きな印刷物、子どもの第1言語で書かれた本、年長児のための言葉遊びなどです。
- 7.1 子どもの興味が保たれるように本や言語教材は入れ替えが行われる。
- 7.2 何冊かの本は現在クラスで進行中の活動やテーマに関係している。

(例. 季節に応じた本が図書館より借り出されている。)

16. コミュニケーション

5.2 さまざまなセンターに子どものコミュニケーションを援助するような教材がある。

(例. 積み木遊びをすところと小さなフィギュアや動物がある、絵本センターに指人形やパネルシアターがある、室内外にごっこ遊びができるおもちゃが置いてある。)

<活動>

19. 微細運動(手や指を使う)

5.1 1日の相当の時間、発達にふさわしい微細運動のためのたくさんの教材で遊ぶことができる。

5.2 教材はよく組織されている。

(例. ペグ・ボードとくぎは同じところにおいてある、組み立ておもちゃのセットは区別しておかれている。)

5.3 やさしいものからむずかしいものまで教材がそろっている。

(例. 異なる微細運動レベルに応じて、取ってつきのパズルから通常のパズルまで)

7.1 興味を維持するために教材は定期的に入れ換えられる。

(例. 興味が失われたら別のもつと換えられる)

7.2 自分で扱えるようにコンテナや棚には使いやすラベルが貼ってある。

(例. コンテナや棚に教材の形や絵のラベル、年長の子どもには名前のラベル。)

20. 造形*

5.1 1日の相当な時間、豊富な材料を使える。

5.2 材料を用いて個性的な表現がたくさんある。

(例. 例示されたものはめったにまねをされない、子どもの作品は多様で個性的である)

7.2 現在進行中の活動に関係のある製作物がある。

(例. 季節について学んでいるときに落ち葉の絵、遠足の跡の絵)

*造形材料の例: 線画材料(紙・クレヨン・フェルト・太い鉛筆など)、絵の具、立体の材料(プラスチック粘土、粘土、木片の接着、木工)、コラージュ材料、道具(安全なはさみ、ホッチキス、穴あけパンチ、テープ・カッターなど)

21. 音楽/リズム

5.1 子どもの使える楽器がたくさんある。

(例. 楽器・音楽プレイヤー・ダンスの小道具が置いてある音楽センター、障害をもつ子どもでも使えるようにしてある。)

5.2 いろいろな音楽が使われている。

(例. 昔からの歌や今の歌、異文化の音楽、歌を異なる言語で歌う)

7.1 自由遊びとグループ活動の両方で音楽が使われる。

22. 積み木* (ここでは*の内容省略)

5.2 積み木と付属品は種類により分けてある。

5.4 1日の相当の時間、積み木の場所で遊べる。

7.2 積み木・付属品が自分で出し入れのできるラベルつきの棚に置いてある。

(例. 積み木の写真か略図のついたラベル)

7.3 戸外でも積み木で遊べる。

23. 砂／水* (ここでは*の内容省略)

5.2 さまざまな遊具が使える。

(例. 容器、スプーン、じょうご、スコップ、シャベル、ままごと道具、型抜き、おもちゃの人形・動物・トラック)

5.3 毎日砂か水で少なくとも1時間は遊べる。

7.1 砂・水遊びが戸外・室内の両方で行える。(天候が許す限り)

7.2 砂と水だけでなくいろいろな遊びがある。

(例. 泡で遊ぶ、砂の代わりに何か砂箱の中身が変わる)

24. ごっこ遊び* (ここでは*の内容省略)

5.1 扮装用の衣装を含め、たくさんのごっこ遊びの教材がある。

5.4 ごっこ遊びの場がはっきりと区別され、遊ぶ空間があり、ものが系統的に収納されている。

7.1 教材はいろいろなテーマによって入れ替えがある。

(例. 仕事ごっこ、空想遊び、アウトドアの小道具箱)

7.2 小道具は多様性を示している。

(例. さまざまな文化を代表するような小道具、障害をもった人が使う設備)

7.3 外での活動的なごっこ遊びに使うような小道具がある。

・ごっこ遊びを豊かにするような写真やお話、見学(お出かけ)がある。

25. 自然／科学*

5.3 自然／科学の教材はよく整理され、よい状態にある。

(例. コレクションごとの入れ物がある、動物のかごはきれいである)

7.3 本、写真その他は視聴覚教材が用いられて、子どもの直接体験を発展させるような知識が与えられる。

*自然／科学の教材は次のように分類されます。

- ・自然物のコレクション(例. 石、虫、種子)
 - ・世話や観察をする生き物(例. 観葉植物、庭、動物)
 - ・自然／科学の本、ゲーム、おもちゃ(例. 自然をテーマにしたカードゲーム)
 - ・料理や簡単な実験のような自然／科学活動
- (例. 磁石、拡大鏡、水に浮くもの・沈むもの)

26. 算数／数* (ここでは*の内容省略)

5.1 発達にふさわしい多様な教材がたくさん使える。

(例. 数えたり、測ったり、形や大きさを学ぶ教材がある。)

5.3 教材はよく整理されていて、よい状態が保たれている。

(例. タイプによって分類されている、ゲームに必要な部品は全て同じところにしまっている。)

7.2 教材は興味を持続させるために定期的に取り替えられる。

(例. カウンターのテディベアが恐竜にかわる、重さを量るものをかえる)

27. テレビ・ビデオ・コンピュータ* (ここでは*の内容省略)

5.1 教材は「子どもにふさわしいもの」に限られている。

(例. セサミ・ストリート、教育的なビデオとコンピュータ・ゲーム、あまりに漫画的でないもの。)

5.3 ほとんどの教材は子どもが主体的に取り組めるものである。

(例. テレビを見て踊ったり／歌ったり／運動ができる、コンピュータのソフトで考えたり意思決定ができる)

7.2 教材が保育室での活動のテーマや内容を発展させるのに役立っている。

(例. 自然をテーマにした活動に昆虫のビデオやCD-ROMからの知識が役立つ、農場についてのビデオで遠足の準備をする)

28. 多様性の受容

3.1 教材の中に人種的・文化的多様性がみられる。

(例. 多人種／多文化の人形・本・掲示板の写真、いろいろな文化の音楽、2つの言語が用いられている地域で子どもの第1言語で使える教材がある。)

5.1 異なる人種や文化・年齢・能力・ジェンダーの人々がステレオタイプで描かれていないような本・写真・教材がたくさんある。

5.2 ごっこ遊びで使うものを含めて、多様な文化を示す小道具がある。

(例. 異なる人種の人形、民族衣装、いろいろな民族の調理や食事の道具)